

Operation BCPで  
止めない放射線診療  
災害・サイバー攻撃・DX停止リスクに  
備える実装戦略

# 3. 災害時における放射線部門の意思決定フロー

湯澤 絃子 東京大学医学部附属病院災害医療マネジメント部

意思決定 (decision making) とは、目的を持って選択肢を取捨し行動を決めることである。つまり意思決定のフローには、目的の特定、目的達成のための目標 (マイルストーン) 設定、選択肢の把握と優劣の判断、これらの情報収集が含まれる。これらの意思決定フローを組織として実行するには、さらに、意思決定者の特定と、指揮系統と情報連携体制の明確化も必要となる。

われわれ医療機関における災害発生後の対応に当てはめて考えてみよう。災害対応の目的はなんだろうか。病院としての災害対応の使命や目的は、自院スタッフ・入院患者・外来患者・来訪者の安全確保、医療提供の継続、地域医療の維持への貢献などであり、平時より、病院のビジョン、ミッションとして提示されているだろう。一度、ご自身の病院の災害時事業継続計画 (BCP) や災害対応マニュアルをご確認いただきたい。その先の意思決定の要素である目標、選択肢の優劣や要否・実行可否は、災害の種類や施設の特性によって異なってくる。一般的に病院のBCPの策定では、災害対応の目的に向かって災害準備期、発災直後から急性期・亜急性期、復興期に至るまで、平時に計画的に準備をしている。ここでの意思決定のプロセスはPDCA cycleに則って行われている。まず、病院の災害対応の目的を特定し、対応時期や案件ごとに目標を設定し、自施設に適切な選択肢を準備し優先順位を決め (例えば、自家発電機や備蓄の準備、止水板の設置、連絡システムの契約など)、plan (計画) を立てる。その計画を、訓練

や実際の災害対応でdo (実行) する。実行した結果をcheck (評価) し、action (改善) 作業を行っていく。この計画や評価、改善の過程は通常、災害準備期に行われるため、時間的な制約はなく、さまざまな資料、参照や専門家や関係者の意見を取り入れるなどの十分な検討を行い進められる。

一方、実際に災害が発生した場合の意思決定プロセスはどうだろうか？ 迅速な意思決定が求められ、刻一刻と変わる状況に合わせ、目標、選択肢の優劣や要否・実行可否も変わっていく。このため、事態の変化に応じた柔軟な意思決定の連続が求められ、OODA loopと呼ばれる意思決定プロセスのループに入る。これは、状況をobserve (観察) = 情報収集し、orient (状況判断) = 状況に合わせた目標設定、選択肢の要否や優劣、実行可否の

見極め、decide (決定) = 取捨し、act (行動) する、を連続的に繰り返すプロセスであり、迅速性に優れ、時間変化に柔軟性が高いとされている。

つまり、災害対応の意思決定プロセスは、災害準備期に行うBCPにおいてはPDCA cycleを、この実行フェーズ内、つまり発災直後から急性期・亜急性期、復興期に至るまでは微調整を繰り返すOODA loopとなる (図1)。

本稿では、放射線部門における災害後の意思決定と実行の要素 (目標設定、選択肢、指揮系統と情報連携体制、情報共有手段) について一つずつ見ていき、その中で、災害準備期にBCPで定めておくことが望ましい内容に関しても言及していきたい。本稿は、あくまで筆者の見解であり、読者には自施設の現状に合わせ解釈し、活用して下さることを期待する。

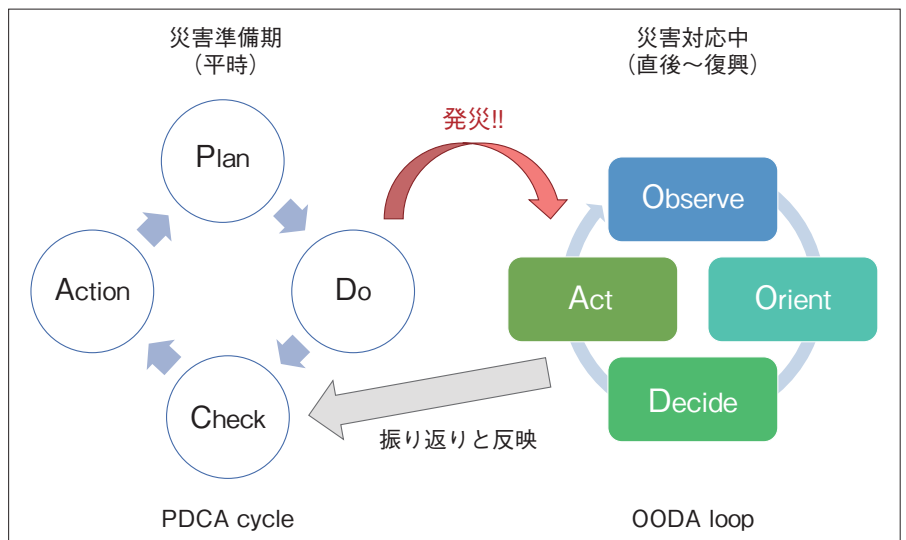


図1 災害準備期と災害対応中の意思決定プロセス